

ドイツ語の社会集團語と方言

ドイツの若者たちも、仲間うちでの連帯や、大人の權威や規範に反抗してみせたりするために、自分たちだけの「若者言葉」(Jugendsprache)を使う。この若者固有の言葉も、しかしながら北部ドイツと南部ドイツではかなり違った様相を見せる。北部ドイツの若者たちは、自分たちのグループの言葉を造りだすために、外国語(特に英語)からの借用語や、ドイツ語の様々のサブ言語、つまり、ならず者たちの言葉、藥物依存者の言葉、無党派左翼の言葉、あるいは兵隊言葉等からの語彙を利用する。これに対して南部ドイツの若者たちは、標準語に近い日常語を使う大人たちと自分たちの間に一線を画すために、それぞれの地元の方言を選ぶ。日常語が使われるコミュニケーション環境の中で、敢えて方言を用いることによって呼び起こされる言葉の違いの効果が、「対抗語」

唐 沢 徹

を必要とする彼らの要求を満足させる。北部ドイツの若者たちは新語を造りだしたり、意味上の変更によって彼らの語彙を豊かにするが、南部ドイツの若者たちはあまりそうした事を行わない。北部ドイツの若者は英語の音楽や、いわゆる「ドイツ・ロック」をよく聞くのに対して、南部ドイツでは「オーストロ(オーストリア)・ポップ」ないし「バイエルン・ポップ」が好まれる¹⁾。この北と南の「若者言葉」の違いには、一つには北部ドイツと南部ドイツにおける方言使用の状況の違いが背景にある。北部の若者の多くにとって、彼らの地域の方言である「プラット」(Platt-deutsch・低地ドイツ語)は、もはや過去の言葉になっている。これに対して南部ドイツでは「バイリッシェ」(Bairisch・バイエルン方言)や「シュベービッシェ」(Schwäbisch・シュワールベン方言)

等は、全階層にわたって八〇%程度の人々によって（方言の度合いの程度はともかく）使われていて、若者たちも勿論その中にいる。「若者言葉」は、しかしながら単に地域言語的な理由ばかりでなく、またその他の様々な要素によって異なったものとなる。田舎と都会、社会的・政治的事情（例えば旧東ドイツと西ドイツの間の）等も勿論そこに加わってくる。

また「若者言葉」といっても、こまかにみれば「大学生言葉」と「高校生言葉」にもかなりの差がある。また若者たちの中でも、一定の専門的職業分野に属する場合には、その分野に特有の「職業語」や「専門語」をも話すことになる。一般に、一定の言葉の話し手の社会的所属性を条件に分類された言葉は「社会集団語」（Sociotekt）とよばれる。この概念は、地域的な違いによる「方言」（Dialekt）に対して、広く社会的な集団に固有な言葉の違いに着目して、Dialektからの類推（Soziolekt）で、社会言語学の分野で用いられるようになったものである。

「社会集団語」は下位に、職業、専門、年齢、性別、居住地域、さらに社会の中の階層、それぞれに特有の語彙や言い回しの「特殊語」を含む。「特殊語」は、単にこれらの客観的な社会的特徴から、いわば自動的に生まれるものではなく、それが使用されるべき、話し手の主観的な態度、意志なしには生まれない。外部に存在する日常の言葉では、自分たちの

特別な関心、要求、活動、つまり自分たちの「特別な世界」が十分に表現出来ないことを知るサブ・カルチャーの成員は、その表現のために固有の語彙を求め、他のグループや社会集団との特別の関係性を確保する。一つの集団の「特殊語」の社会的機能は、その関係性の表現であり、集団内部の連帯、結束、所属性を象徴し、他の社会集団にに対する「対抗言語」となる一方、他集団からの差別、疎外の原因ともなり、ひとつの「言語障壁」となる。近年（言語）変種の「言語学」が活発となっているが、それは言葉を社会集団や言語共同体から解明するとともに、そのようなものとしての言葉から社会を解明するものでもある。以下はドイツの社会を理解するための一助に社会言語学の観点から、ドイツ語の中の社会集団語と方言を取り上げるものである。

一 「ロートヴェルシュ」と

ミュンスターの「マゼマッテ」

ヴェストファーレンのミュンスター市の一部の地区に「マゼマッテ」（Masematie）と呼ばれる言葉がある。この言葉はしかしながら今滅びようとしている。なぜならば、この言葉の話し手はまったくの少数であり、かつ高齢でもあり、なによりもこの言葉を好んで使おうとする人がいなくなっているからである。「マゼマッテ」は、ミュンスターを地域の中

心とした社会的下層住民の言葉として、社会言語学の「特殊語」に分類される。ドイツの各地にも類似した言葉が存在するが、それぞれの地域の方言や混入した言葉の違いによって、それぞれの特徴を持つのである。「マゼマッテ」の場合は、まず土地の方言である「ミュンスター・プラット」(ミュンスターの低地ドイツ語)あるいは、ヴェストファーレン方言とよばれるものが土台にあり、そこに、シンティやロマのジプシー言葉、それにヴェストファーレンのユダヤ人との接触による彼らの言葉の語彙が流入し、さらに放浪者の「隠語」としての「ロートヴェルシュ」の語彙が混入しているものと考えられている。

一般に中世に端を発する、放浪者や乞食、泥棒のようなアウトサイダーの「ならず者言葉」・「詐欺師の言葉」は、広く「ロートヴェルシュ」(Rotwelsch)とよばれる。この評判の悪い言葉は、今日においても渡り歩く職人等に受け継がれていてその生命を保っているし、後に見るように昔から「学生言葉」を中心に「若者言葉」にも影響をあたえている。ここにとりあげている「マゼマッテ」は、「ロートヴェルシュ」の一方言なのである。すでに一五二八年にマルティン・ルターは、放浪者や詐欺師の生活を記した民衆本として当時出していた「放浪者の書」(Liber Vagatorum)に、自ら序言を書いてヴィッテンブルク版として出版させたが、その序言にお

いて「ロートヴェルシュ」の語彙の語源について「これらは明らかにユダヤ人に由来するものである。なぜならここには多くのヘブライ語が含まれているからから。」と書いた。これは、「ロートヴェルシュ」に関する言語学的考察の端緒であるとされている。「ロートヴェルシュ」とは、中高ドイツ語のhot(乞食)と、同じくwelsch(外国の、ロマンス語の)から成り、「見知らぬ、訳の分からない言葉」の意味をもつ。「ロートヴェルシュ」は、また一部の地方で「イエニッシュ」(Jenisch)とも呼ばれる。この場合は、ジプシーの言葉のJenisch(放浪の、抜け目ない)が基になっている。このような呼び名や語彙の語源から推測がつくが、この言葉はヘブライ語、イディッシュ語、それにジプシーの言葉からなる混成語である。この言葉は、中世以来、都市に定住出来ない社会的最下層集団もしくは個人、つまり、放浪生活者、乞食、泥棒、傭兵、売春婦、死刑執行人、大道芸人、皮はぎ人等のコミュニケーション手段であり、さらに一七—一八世紀には犯罪者集団の言葉の側面を持つようになった。通常のドイツ語でないこのような言葉を使う目的は、仲間うちだけの意志疎通、つまり外部の普通の人々に解っては困るような会話を可能とするためであり、その意味で「秘密語」・「隠語」であった。同時にそれは、それを使う者としての集団への帰属、連帯を表すものでもあったはずである。ユダヤ人の使うヘブ

ライ語源の言葉、同じくユダヤ人がドイツ語をもとにヘブライ語と混成させて使うようになったイディッシュ語の言葉、そしてジプシーの言葉は、当時、一般のドイツの人々にとっては理解の出来ない言葉であった。そのために、自分たちの意図を隠蔽する必要のあった最下層集団にとっては、「ロートヴェルシュ」は生存に不可欠のコミュニケーション手段であったのである。この「ロートヴェルシュ」そのものについての研究は、すでに一六〇一七世紀に始められていて、一八〇一十九世紀にはその「辞典」、「文法」、もっとも多くは「単語集」のような形で出版もなされた。今日から見れば、それらは多く偏見から自由であったわけではなく、また未だ大まかなものであった。一七五五年にフランクフルト(マイン)で出版された「ロートヴェルシュの文法と話術」という本のサブタイトルには、「これは、どのようにしてこの言葉を短時間の内に学び、話し、理解するようになるかという指導書である。特に、旅で宿屋やその他の人の集まる所に行く人達にとって、この言葉を使う悪党やならず者が近づく時に、それを理解して、恐ろしい行為から逃れるのに役立つという利点を持つ」と書かれていたように、悪い人達から身を守るという、いわば「実用的」な目的があったのである。一九〇一年にF・クルーゲは、この言葉の、その土地ごとの特別の特徴をもった「ロートヴェルシュ諸方言」について発表し、

研究の新しい側面をひらいた。幾つかの例を挙げるならば、先にあげたミュンスターの「マゼマッテ」の他に、同じくヴェストファーレンのリンネル商人の「バルグンシュ」(Bargunsch)、または「フンピッシ」(Humpisch)、ザウアーラントの鎌商人の「シュラウスメン」(Schlausmen)、ニーダーラインの「ヘネゼ・フレック」(Henese Fleck)、アイフェルのパン焼き窯職人の「レックバー・タルプ」(Lebber Talp)、ギーセンの「マニッシ」(Manisch)、フオーゲルスベルクの「リンゲルバッハー・ムジカントンシュプラッヘ」(音楽師の言葉)、「Lingelbacher Musikantensprache」、中部フランケンの「シリングスフルスター・イエニッシ」(Schlingstürster Jenisch)、ローテンブルク・オブ・デア・タウバーの「ローテンブルガー・ロートヴェルシュ」(Rothenburger Rotwelsch)、ウィーンの「ウィーナー・ガレリー」(Wiener Galerie)、ベルンの「ベルナー・マッテンエングリッシ」(Bernier Mattenengisch)等の合計一六地域または都市に「ロートヴェルシュ」の方言が存在していることが確認されている。⁴ ミュンスターの「マゼマッテ」は、ミュンスターの住民と旅回りの商人や、職人、戸別に訪れる物売り、大道芸人、よそものの労働者等との接触の中から生まれ、独自の語彙と社会的特徴を備えることによって、他の「ロートヴェルシュ」方言から区別されるこの

土地の「特殊語」となった。「マゼマッテ」という名称は、はへブライ語の *masa'untan*（仕事、取り引き）を語源としている。この言葉の目的は「隠蔽」にあった。「マゼマッテ」は特に市の4地区で発達し、主に用いられたのは、家畜市場や街頭での商売であった。使い手はもっぱら男性で、話しことばとしてつかわれた。しかしながらその後ミンスター市民たちがこの言葉を受動的に理解するようになり、使う人も多くなり、この言葉の本来の「秘密語」としての機能はなくなってしまった。第2次世界大戦まで、主にそれが発達した4地区で日常的に話されていた。一定の話し手集団としてユダヤ人やシンティ・ロマは重要であった。現在この言葉の消滅が時間の問題となつてから、この言葉を文字にする試みがなされるようになった。「マゼマッテ」が資料の上で確認出来るのは一八七〇年ごろのことであるが、しかしながらミンスターに定着していたことについてはより以前のことと考えられている。それは、ヴェストファーレンの森林伐採人たちの「浮浪者ことば」と呼ばれるロートヴェルシュ方言の存在や、ヴェストファーレンでのユダヤ人解放とのかかわりで推定されるのである。⁵「ロートヴェルシュ」の形成にユダヤ人の言葉が大きく関与していることは明らかであるが、それは当時のユダヤ人の極めて限定された社会生活基盤、生計手段を背景としたものであった。都市ミンスターにユダ

ヤ人の名が初めて現れるのは一一二七年から二八年のことである。一三世紀には、シナゴグ、墓地、ミクヴェを持つユダヤ人共同体が出来上がっている。しかし一三五〇年のペスト流行時に迫害され、五年後にまた定住を許される。一五五四年に再び追放されたが、数名の貴族がユダヤ人追放令を無視してユダヤ人を受け入れた。ユダヤ人は家畜商人、食肉商人、ワイン商人、繊維商人として働いた。司教がユダヤ人に対する通行税徴収権を取得した後、一六〇〇年から再びユダヤ人の定住がはじまった。しかしながら一六六二年カトリック領邦として最初の「ユダヤ人条例」の発令の後、一八二〇年にプロイセン領となるまでの間は、その「ユダヤ人条例」のもとに居住、通行、経済活動の制限や締め出し、また生活態度や宗教に対する規制を受けることとなった。一八一〇年にユダヤ人のミンスター市への定住が再び許可された。⁶一六世紀から一七世紀にかけての、ユダヤ人の都市からの締め出しは、ユダヤ人社会の貧困化を招いた。宮廷御用人として、特権的な地位にいたユダヤ人もいたが、それはユダヤ人口の二%にすぎない。また三〇年戦争以後に高額の税金を払って質屋や金貸し、家畜商、穀物商、古物商として生計を立てることの出来た「保護ユダヤ人」もいたが、それも長く続いたのではなく、一八世紀後半にはユダヤ人社会の全体的な貧困化によって、下層階級に転落したのである。ユダヤ人の多く

が「乞食ユダヤ人」となっていた。「乞食ユダヤ人」とは、保護状も身分証明書もたず、定住する所もなく、就業許可もないユダヤ人のことである。まさに放浪するユダヤ人であった。この「乞食ユダヤ人」として諸国を放浪するものの中に東欧からのユダヤ人も加わった。一六四八年からのフメルニツキーによるポグロムを逃れてポーランドから、さらにボヘミアからの大量の移住者もいた。本来、ユダヤ教の定めでは、困窮したユダヤ人の救助を拒むことはできなかった。

物乞いをし、泊まる所のないユダヤ人同胞ならば、一晚の宿と食事を与えるのであった。これは共同体の形で暮らすユダヤ人の社会扶助のシステムでもあった。しかしながら一七世紀から一八世紀にかけて「乞食ユダヤ人」の数が、ドイツにいたユダヤ人全体の一〇%から最大三〇%にまで増大したことによって、共同体による援助は不可能となった。ユダヤ人の共同体には、共同体の成員の正しい生活態度に対する集団的責任と、よそ者に対する監督義務とが課されていたが、財政的な負担の他に、泥棒やならず者がその中に含まれているかもしれないよそからの「乞食ユダヤ人」を受け入れることが、共同体にとって一定の危険を意味したからである。また多くの領邦が、重罰の脅しをもって共同体に対して、よそからの「乞食ユダヤ人」の受け入れと扶助とを禁止した。また例えば、バイエルンやバーデンは、「乞食ユダヤ人」を国外追放す

ることによって、この問題を解決しようとした。その結果多くの地域で、困窮したユダヤ人が盗賊団に結集し、ユダヤ人同胞に対しても犯罪行為に及んだのである。このようにして、社会の最下層となったユダヤ人とまた都市の発達によって旧来の農村の古い社会構造、経済構造から解放され、都市の周辺を放浪するドイツ人の下層階級とは、社会の周辺集団、アウトサイダーとして接触しているのである。彼らは臨時の仕事を求めて街道をさまよった。「ロートヴェルシュ」が「街道の言葉」ともよばれるのは、このためである。

このミュンスターの郊外のヒュルスホーフ城に生まれ、二九歳の時に城主であった父親の死後、数キロ離れたリュッシュハウスの館に住み、五一年の生涯の晩年の数年をボーデン湖畔のメーレスブルクで過ごしたほかは、郷土ミュンスターラントにとどまり、郷土を擬視し続けたドロステ^{II}ヒュルスホーフ（一七九七—一八四八）は、ヴェストファーレンの荒れ野や森林の自然、動植物を抒情詩に歌い、旅行記の形を取った「私たちの郷土では」（Bei uns zu Lande auf dem Lande, nach eines Edelmanns aus der Lausitz）において、ヴェストファーレンとミュンスターラントを写實的に描写する。ウィーン会議後の反動のメッテルニヒ体制の中で、一八三〇年のフランスの七月革命を受けてハンバッハに自由主義者、民主主義者、共和主義者が「統一と自由におけるドイツ

の再生」を求めて集まり（一八三二）、蒸気機関と工業化が新産業社会への急速に変貌を促し、労働者階級が各地で立ち上がり、知識階級が政治に対して態度決定を迫られ、革新的「青年ドイツ派」のハイネやベルネがフランスに「亡命」してコスモポリタンとなる時代の只中であって、自らの郷土にとどまり、静かにその自然と人々と時代の変化を観察した彼女が、完結した短編として残した「ユダヤ人のぶなの木」（Die Judenbuche）（一八四二）は、この時代のミュンスタール周辺の社会的状況を克明に描きだしている。ドロステはこの短編の副題に「山深きヴェストファーレンの風俗画」と記した。これは、騒然とした時代の中にあっても、ヴェストファーレンがその地理的事情から「あたかもドイツから閉め出されて」いて、いまだ「不思議な眠りの国」であり続けている、古い体制のまま農村的社會構造をとどめていること、その郷土の山林、自然の中にいわば自然と一体になって暮らしている人々を、不可抗の自然力、見えない意思に従うままの存在として描写しようとする宣言のようにも思える。この物語は、ドロステが幼時に祖父から聞かされた実話を元にしている。「この物語は大体一七八九年九月に実際にあったとおりの出来事を記したものである」とある。実話のあらすじは、「かつてヴィンケルハネスという一人の作男が、あるときユダヤ人を殺して遁走したが、やがて海賊に捕らえられて奴隸となり、

一七年間酷使されて苦しんだが、その後帰郷して、かつて彼が殺人罪をおかした場所に上げている同一の樹木の下で、みずから首を括って死んだ。」というものである。ドロステは主人公をフリードリッヒとし、酒癖の悪い父親の二度目の妻との子として描いている。この妻も酒癖を止めさせる事が出来ず、生活は荒れはて、妻はすべてに疲れはて、ひとりっ子のフリードリッヒを正しく育てる気力もなくす。大きくなったフリードリッヒは、伯父を手伝うが、その仕事のために善悪の感覚を失って行く。村の顔役に成長した彼は、アーロンという屠殺者で時折古物商を営むユダヤ人から高価な時計をだまし取り、支払いを求めるユダヤ人を森のぶなの木の下で殺害する。彼は仲間と逃走し、二八年後におちぶれて村に戻り、ユダヤ人を殺したぶなの木に首を括っているのが発見される。このぶなの木は、ユダヤ人が殺された直後に、それを聞いて集まって来た付近の多勢のユダヤ人たちが、領主に申し出て高値で買い取ってそこに残してあったのである。彼らはそのぶなの木の幹に、ヘブライ文字で「なんじこの場所に近寄らば、なんじの我になせし事、なんじの身にも起こるべし」と刻んであったのである。この短編は、このような出来事が起こる背景に、この地の山林においてはびこった盗伐団の横行を描いている。山林官の監視の強化にもかかわらず、一夜のうちに森の広い区域を切り倒し、木材を跡形もな

く運び去るのである。それを運ぶ車のわだちの跡は村には続かない。おそらく船持ちの保護を受けて、川伝いに木材需要のある外国にまで運び出すのであらうとされている。付近の村民と山林官が必死に犯人探しをするが、嵐の夜にも、月明かりの夜にも必ず盗伐がある。ある朝、夜明けの三時ごろ森の中で放牧の牛の見張りをしていたフリードリッヒのところに村の山林官たちが現れる、森の別の方向に山林官の伐採人たちの音を聞いたと彼が伝えと、山林官は顔色を変える。その方向を教えた後、しばらくして銃声がきこえる。山林官は死体で発見される。ドロステは、この短編の中で一体誰が盗伐を行っているのか、山林官を殺したのは誰かもはっきりとは書かない。多くの事柄が読者の推測に委ねられる。全体が、深い森の霧の中の出来事のように謎めいて描かれている。ユダヤ人殺しの件で、領主のところには裁判長から、盗伐の一味を捕らえたところ、その中の「乞食のモイゼス」と呼ばれるユダヤ人が、同じユダヤ人のアーロンという男を森で殺したと白状した後に、靴のひもで首を括って死んだ、という報告が入る。「これに対して貴下はどうお思いでしょうか。アーロンという名前は、極めてありふれた名前です。」とその報告書は終わっていた。つまり、ここでも「乞食のモイゼス」が殺したというのが、フリードリッヒが殺した（と推測されている）ユダヤ人アーロンのことなのか、それとも全く

別のアーロンのことなのか、読者は混乱させられるが、ドロステはそれ以上ことを何も書かない。全体を読むと、盗伐には村の少なからぬ人間が加わっていたのである。フリードリッヒの伯父の仕事もこれであつたし、山林官に見つかつて彼を殺害したのも、この伯父なのではなかったかと読める。

フリードリッヒ自身もこれを手伝っていたのである。恐らく、盗伐はプロの一味と村人との共同の仕事であつたように思われる。この一味には、困窮した乞食ユダヤ人を含む浮浪者集団が加わっているのは当然の事であらう。森林の盗伐は、当時ドイツの大きな問題であつた。カール・マルクスは、一八四二―四三年に「ライン新聞」の編集員であつたが、そこで土地所有の問題、農民の状態と並んで森林盗伐の問題をとりあげていた。ドロステの「ユダヤ人のぶなの木」は、このような時代的、社会的背景の中の出来事である。

ドロステ・ヒュルスホーフは、もちろん森林盗伐団の話していた言葉について何かを書き記したわけではない。このような言葉への社会言語学的関心は先に書いたとおりに、最近のことなのである。一九七〇年に、K・シュパンゲンベルクは「森林伐採人のロートヴェルシュの浮浪者言葉」において、ヴェストファーレンの森林伐採人（盗伐人ではなく）の言葉についての社会言語学からの研究によって、このような職業集団の言葉が「ロートヴェルシュ」の一つであることを明ら

かにした。¹⁰この言葉と「マゼマッテ」との関係が、前にも触れたが、考えられている。ミュンスター市は第二次大戦中に爆撃に会い、「マゼマッテ」が話される地区も被爆した。また一九四二年二月までに市内に残っていたユダヤ人は、七月末までに全員リガの強制収容所へ強制移送された。強制収容所の解放後にミュンスターに戻った者は僅かであるとされている。¹¹このことによって、この言葉はその存在の本来的な基盤を失ったために、消滅の道を歩んでいる。言語学者はミュンスターに研究と保存のためのプロジェクト・チームを結成した。彼らの仕事は、①音声媒体記録（アルヒーフ）の作成、②書かれた「マゼマッテ」の資料収集、③「マゼマッテ」の辞書の作成、である。特に、最後に残された話し手同士の自然の会話が音声として収録されるならば、話し手の消滅の後にも将来的に「特殊語」研究のために利用出来ることになる。現在ミュンスターの一地区に、最後の話し手たちの隠れた会話のニッチが存在する。言語学的にはしかしながら、真正の話し手と、標準語を話すようになって元来の「マゼマッテ」を気がつかないうちに変形している話者との区別、といった問題が生じよう。またそれは、特に戦後この言葉を書かれた資料にした「書き手」が、しばしばこの言葉の一次的話し手の圈内に属さず、時間的隔たりと標準語への参加の結果から、無条件で真正の「マゼマッテ」であるとは受け入れられない

ようなものに変形させている可能性も出てこよう。特に重要になってくるのが、真正の、一次的話し手の記録を残すことであろうが、これには次のような困難がある。つまり、多くの一時的話し手は、話せるということをも否定するのである。また、現在標準語を話す話し手にとっては、「マゼマッテ」は、もはやタブーなのである。記録のために協力したほんの僅かの人々は、名前を出さないという条件をつけた。社会言語学的には、このことが現在の「マゼマッテ」という言葉の「社会集団語」としての意味であり、機能である。つまり、この言葉は、当初から付随した不名誉、当時の話し手たちへの差別によって現在消滅するのである。

二 「学生言葉」・「若者言葉」

ドイツ語の「特殊語」の研究は、一九世紀にドイツ語標準語が、音韻論的にも正書法の上からも統一的規範化を経た後に前進をとげた。標準語の成立とともに、標準語から逸脱した言語形式ないし変種が問題となったのである。一九一〇年に文献学者R・アイレンベルガーは特殊語研究についてつぎのように書くことが出来た。「特殊語が我々の言葉の発達に對して持つ意義は、今日一般に認められている。それはさまざまな領域に関する詳しい研究を通じて説明され、価値が認

められている。我々はすでに、学生、兵士、水夫、猟師、鋤夫、印刷工、ならず者の言葉についての包括的な記録を所有している。特殊語は独特なものであり、そこには意識的な孤立への傾きがある。社会の障壁や職業の障壁が、また言葉の中での限界になり、話しぶりや語彙の限界になる。特殊語の秘密性や不思議さを追求する努力は様々であるが、ならず者や学生の言葉にあつては、それは必要性の要請である¹²。ここには特殊語が標準語に及ぼす意義が語られているが、J・マイアーは別にこの事を次のようにまとめている。「我々の共通語の生命は一樣の広い川の流れとなつて流れる。あらゆる方向から、小川や細い流れが川床に流れ込み一緒に流されて行く。共通語がその新しい原料を供給されるのには三つの大きな領域がある。それは(1)様々な職業の言葉である。鋤夫の、漁師や猟師の、兵士の、そしてその他の職業の言葉。さらに(2)方言。それは民衆の話題の汲みつくしえない、湧きだす怒りの中から、我々の色褪せた文章語の血管の中に新鮮な生命の血を注ぎ込む。最後は他の言葉からの借用である。(……)階級・身分の言葉の中で最も興味ぶかいものは大学生の言葉である。(……)我々の文章語に大学生の言葉ほどの影響を与えた階級語はなかった。(……)そして日常語の領域となれば、ほとんど学生たちの言葉の色合いに染められている¹³」。歴史的に見るならば二〇世紀に至るまで、ドイツ

における「若者言葉」の「特殊語」としての研究は、同年令層の若者のうちのアカデミックな、大学に学ぶ男性の若者のそれ、つまり「学生言葉」に限られていた。その大学生たちはエリートとしての高い社会的地位を占める一方、本当の大人としての義務と権利は、地域社会においても家庭においても与えられてはいなかった。学生生活は大人の役割への参入を遅らせるものであった。彼らはその意味で社会の枠外にいた。その彼らの、集団内部のコミュニケーションのための「学生言葉」、それはそのような集団として社会に対して一線を画するために「特殊語」として形成された訳であるが、この言葉が共通語に少なからぬ影響を与えていることが早くから認識されていた。「学生言葉」(大学生言葉)(Studentensprache)の形成は、一七世紀にクリスチャン・トマジウスがドイツ語をラテン語に代えて学問語としたときに始まる。一八〜一九世紀頃のドイツの大学生は、自由・闊達で、しばしば無頼で、「大言壮語」する存在として語られるが、彼らは一般的な社会から離れた生活を送っていた。彼らは自分たちの会話に、神学および聖書の語彙、古典語からの語彙、さらには「ならず者の言葉」つまり「ロートヴェルシュ」からの語彙を多用した。また大学入学前のギムナジウの生徒を「蛙」(Frosch)、大学の新入生を「狐」(Fuchs)、学生組合に入らない学生を「鹿」(Hirsch)または「らくだ」(

Kamel)と呼んだり(くそまじめなため)、また一〇代半ばの娘を「バックフィッシュ(Backsch)」(フライ用の若魚)というように、動物の名前をメタファーとして多用したりした。これらの多くは、今日の日常のドイツ語の中に定着して使われているのである。

一八二四年九月、ゲッティンゲンの学生であったハインリッヒ・ハインは、ゴスラルからブロッケン山へとハルツ山地へ一人で旅をした。その後ワイマールにゲーテを訪ね、エルフルト、ワルトブルクを経て十月半ばにゲッティンゲンに戻っているが、その旅の前半を「ハルツ紀行」(Hatzreise)として出版した。彼はその冒頭で「ゲッティンゲンの俗物学者の数はたいへんなものだ、砂粒のように、というよりは海辺の汚物のように……」と書いた。「ハルツ紀行」は、権威や理想への批判、揶揄によってドイツ中の話題となった本であるが、中でもゲッティンゲンの学者たちを馬鹿にした記述も多い。上にあげた「俗物学者」は、原文でPhilisterである。この言葉は現在では「小市民的な俗物」とか「分からず屋」の意味で普通に使われる言葉であるが、これは本来「学生言葉」である。Philisterの本来の意味は「ペリシテ人」である。つまり旧約聖書に出てくる、神に選ばれた民としてのイスラエルにとっての最悪の敵、セム系でなく、割礼をしない、おそらくインド・ゲルマン系と見られている民族である。彼ら

は海岸平野から出発して、ヨルダン川西岸地域全体の征服を試み、それを達成するところであったが、最終的にはダビデが撃退した。一七世紀の学生たちは、彼らの目の敵であった都市の兵士や警官を「ペリシテ人」と呼び、自分たちを(精神的に)「選ばれた民」に擬したのである。その後この言葉は「大学生でない人間」一般を、そしてまた「小心翼翼とした、融通の聞かない生き方の非精神的な市民」を指すようになったのである。このように書かれたゲッティンゲンの教授たちは、自分たちに対するそしてゲッティンゲンに対するハインの無礼な記述に怒り、「ハルツ紀行」のゲッティンゲンでの販売禁止に持ち込んだのである。この例のような、神学や聖書の分野からの語彙は当時の学生たちが好んで使ったものである。それは、現代とは比較にならない、当時における神学の大学における地位から来るものであった。しかし学生たちは、それをあざけり、パロディーやカリカチュアにも利用した。それは、例えば、「聖書の蚤」(Bibelusaren)は「神学生」、「マニ教徒」(Maichäer)は「借金取り」(mahnen・〈督促する〉との音の類似から)等がそれである。また古典語(ギリシャ語・ラテン語)を利用するという事も非常に好まれた。特にラテン語は学生たちにとって不可欠の学問の言葉であったために、それを基にした表現が数多く学生言葉として定着した。ラテン語の semper (常に) を利用し

た *semper lustig* (いゝも楽しい) 同様に *numquam* (決して……ない) による *numquam traurig* (決して悲しくない)。また *illuminio* (明るく照らす) による *illuminiet* (酔っぱらった) 等がその例である。ギリシャ語の *—os* やラテン語の *—us*、*—is* のような後綴りの利用も多い。 *pitifig* (賢い) に *—us* を付けた *Pitificus* または *Pitifikus* (賢い奴) 、『Bursch (学生組合の学生) にギリシャ語の副詞語尾を付けた *burschikos* (学生らしい・へ女の子に対して) おてんばな) はその例である。またラテン語の *sis mihi mollis* (我が友であれ) を縮約した *Schmolli* は学生同志の兄弟固めの「乾杯」の語として使われ、答礼として *fiducia sit* (信頼万歳) が *fiducit* に縮約されて返されるのである。

学生言葉の中にはまた「ロートヴェルシュ」の語彙も多く取り入れられた。学生として社会への正式の参入を留保された状態の彼らもまた社会の枠外にいて、なおかつ大学を渡り歩くために街道を旅することが多く、同じく街道を放浪する人々と接触したのである。先に記した如く、「ロートヴェルシュ」は、定住地を持たない、無産の、放浪の周辺集団の「秘密語」であった。この「街道の言葉」・「ならず者の言葉」の多くは一度「学生言葉」の中に取り入れられ、そこを経由して共通の日常語に入ったものが多いのである。学生たち自身にもともと粗野な行動が多く、決闘をしたり、新入生

を苛めたり、教授の家の窓を壊したり、勝手な服装をし、酒場の亭主が勘定書を持ってくるとその亭主を散々殴ったり、というような行動が報告されている。そのような学生たちは「汚い」言葉をまた好み、特にお金、賭け事、性にかかわる言葉に「ロートヴェルシュ」からの言葉が取り入れられたのである。本来の「ロートヴェルシュ」で、「学生言葉」に入り、今日よく使われているものには、 *Moos* 「〔(Geld)金〕、*schöfel* 「〔(Gemein)卑しい〕、*Macke* 「〔(Fehler, Tick) 欠陥、妙な考え〕、*Ische* 「〔(Mädchen) 女の子〕、*Mies* 「〔(übel, scheuch) 不快な、悪い〕など数多くあるが、それらはほとんどがヘブライ語、イディッシュ語を語源としている。大学生の言葉にかんしては、一八〇一九世紀にかけて各地の大学からのものが調査され、単語集や辞書にまとめられた。「学生言葉」の特徴を挙げるならば、①創造的な言葉遊びを楽しむ、②粗野で乱暴化する傾向、③「ロートヴェルシュ」の導入、④風刺や皮肉の傾向、⑤当局や諸制度に対する、用心深いあてこすりによる批判、等が主要なものである¹⁵。

今世紀には「学生言葉」の研究は、その対象を大学生の言葉から「高校生の言葉」(*Pennälersprache*) へと移してきた。 *Pennäler* は、一七世紀には若い大学生を意味し、現代の日常語では高校生を意味する。先の、「ならず者や学生における特殊語の秘密性が必要性の要請である」とした R・アイ

レンベルガーは、今世紀の初頭に全ドイツの「高校生言葉」を調査したが、結論的に「方言の影響は軽視できない」、「部分的に、方言の語彙が高校生の言葉に移行している」ことを認めた。また、高校生と大学生の関係の中から、多くの大学生言葉が「高校生言葉」に流入していて、「ロートヴェルシュ」の語彙もそのようにして高校生に受け入れられた。それは、以後広く世間の人々にも知られるようになったのである。

第二次大戦以後、今日の「若者言葉」への着目は一九五〇年代の末から行われるようになったが、六〇年代には「私たちの言葉」(Halbstarkendeutsch)の評価が争われたり、「ならず者言葉」つまり「ロートヴェルシュ」からの表現に賛否が入り乱れたりした。一九八〇年代には「コマーシャリズム」の標的となった。さきに書いたように、「特殊語」の研究は新しく、特に社会言語学の展開は一九七〇年前後のことである。ドイツにおいても「若者言葉」は、特殊語研究への一般的な関心の増大の中で新たに発見された。商業出版界・メディアはそこに市場の拡大を見て取り、「若者シーン」の言葉を雑誌やポケットブックにして売出したのである。そこでは「若者シーン」から、ちょっと小耳に挟んだ駄洒落やら、決まり文句、ジョークが紹介され、さらには編集者のアイディアでパラフレーズされたものも「売り出され」た。「若者

言葉」というテーマでの大量の商業出版物の出現に対しては、「メディアが〈若者言葉〉として理解し、そのような物として売っているものが、実際に若者たちの間のコミュニケーションで使われているのであろうか？ あるいは、ひょっとして〈若者言葉〉の大部分はメディアの投影でありメディアの産物なのではないのか？」という疑問が出されるようになった。つまり、「若者言葉」が若者たちの間で作られるのみならず、大部分が大人によって若者のために作られる」ことの指摘である。これに対しては、若者たちはメディアによって「若者言葉」として「売り出された」表現を知っているが、彼らはそれを、もはや予想されるほど頻繁には使わないし、無反省にも使わない、とのことである。¹⁶この数年においては、出版業界やメディアによる「若者言葉」の制約のない商業化に対する鋭い批判がなされている。

一九九〇年にH・エーマンは今日の一般的な「若者言葉」についての調査を行った。その調査は、ハンブルク、ルール地域、ライプツィヒ、ベルリン、ミュンヘン、トラオンシュタイン(バイエルンの山岳地域の例のために)、ウィーン、ベルンの各地において、一三歳から二五歳までの若い男女五〇名の協力を得て行ったものである。調査の目的は、若い人々の言語コミュニケーション活動における地域主義についてであった。調査においてエーマンは、一方で若者の言葉に對す

る外部からの影響を、そして他方で「若者言葉」を標準語に對抗して使う「利点」を問うたのである。外部からの影響は、①メディアによるもの、具体的には、(a)音声メディア（ラジオのコマーシャル、ドイツ語そして英語の音声音楽等）、(b)AVメディア（テレビ、映画、ビデオ、テレビや映画のコマーシャル等）、さらに(c)印刷メディア（コミックス、若者雑誌、ナンセンス・ブック等）が調べられた、さらに外部からの影響には、②外国語からの影響が調べられた。これは例えば、英語とドイツ語の組み合わせ（又は逆）、（例：『Topleistung（最高の成績）、Dauerpower（持続力）』、またラテン語・ギリシャ語の ultra-、super-、hyper-（超・〈チョー〉？）との組み合わせ（例：hypermäßig〈すごく良い気分〉、その他オランダ語やイタリア語との組み合わせの形で表れるものである。また外部の影響には、③各種の下位言語（サブ言語）によるもの、つまりコンピュータ言語、スポーツ言語、ディスコ・ドイツ語、兵隊ドイツ語、ノンセクト左翼の言語、ドラッグの用語、そして「ロートヴェルシュ」等からの流入語が考えられた。他方の標準語に対して「若者言葉」を使うコミュニケーション上の利益、利点については、使う側の主観的、主體的な意識を問うものである。一般的には、連帯の感情や、大人への対立の意識、オリジナリティの確保、不安の補償措置、エモーションの発現等が

考えられるところであるが、こういった「内的」な理由の調査である。この調査の結果が、冒頭に書いた北部ドイツと南部ドイツの「若者言葉」の違いであった。エーマンがそこにおいて確認したのは、一般的に「ドイツの若者言葉」と語ることが、言語学的には困難であるほどの北と南の明白な不一致であった。南ドイツの方言が優勢な地方では、郷土の方言を取り入れ、方言を「守り育てる」ことが、大人たちのますます方言の輪郭がばやけてゆく地域的日常語へのある種の「対極」をなす。一方北ドイツの若者にとっては、もはや大人の言葉に對抗する「代案」を方言が提供してくれる状況は存在しない。このために、新語を作ったり、意味の変更を行ったり、英語を取り入れたり、あるいは各種のサブ言語に興味を示すのである。

三 方言と社会集団語

方言 (Dialekt) と社会集団語 (Soziolekt) は、本来異なる概念である。ところが上に見たように所々で両者は重なり合う。一九七〇年代始めに社会言語学がドイツに導入された当初には、方言を社会集団語と同一視する議論がなされた。それは特に、方言が社会の下層の階級言語として、イギリスの社会学者 B・バーンスタインの言う「制限コード」のシン

ボルの如き扱いを受けたからであった。「洗練コード」と「制限コード」の区別が、標準語と方言の対立に単純化されて適用され、方言の持つ「欠損」は、方言話者の社会的進出を妨げ、その階層に閉じ込める、いわば「言語障壁」と見なされたのである。その意味では、方言は「補正」されるべき言葉であり、学校においては「方言話者を標準語へと促進する」ことが目標になった。しかしながらこれは、W・ラボフの「すべての言語変種は、標準に対して等価である」との「差異仮説」理論をもとにする議論の展開と、実際の調査による反証によって変更をうけた。バーンスタインの「洗練コード」と「制限コード」の理論が余りに一般化されて、イギリスの事情とドイツのそれとの違いを考慮せずに適用されたことが反省された。イギリスでの長期の工業化のプロセスによる社会階層の分化と、地域ごとの独自性が強いが故に統一語の発達が遅れ、そして社会階層の二極分化が進まず、各地方に異なった方言・地域言語を温存するドイツの事情はおのずから異なるものであった。特に言語による認知の決定論が批判され、また南部ドイツでの社会の上層階級での方言使用の実態が指摘され、標準語の絶対化による方言地域の生徒の疎外、脱落のマイナス面が明らかにされたことによって、方言を排除したり、軽視したりしないドイツ語教育が模索されることとなった。それは、方言を「出發語」として、「目標語」

に標準語を置く「対照的文法」の導入によって解決されることとなり、各方言地方の事情にもとづいた教師用の「手引き書」が作成された¹⁷。ただし、方言が「社会集団語」のような機能を持つ場合もあることは考えにいれなければならない。例えばU・アモンは言語変種を整理して、①公的状况での使用が正しいものとされる国家域(国レベルの標準変種)、②話者の地域上の帰属(方言的な帰属)、③話者の社会的な帰属(社会集団的な変種)、④コミュニケーション状況の特異性(状況による変種)に分類したが、それぞれの言語変種は決して一義的にこの四つのどれかに分類されるものではなく、これらの複数のものに渡って帰属する可能性を考える。その例として、彼はプファルツ方言をあげる。プファルツ方言は、上の②にも③にも、また④にも入るのである。¹⁸つまりプファルツ方言は方言であると言う以外に、地方の社会的下層の言葉であり、また非公式的状况での言葉という性質もあわせて持っているからである。このことは一九八九年のM・フントによるハンブルク、バイエルン、シュワーベン、プファルツ各方言の評価に関する調査においても、極めてネガティブな評価をうけるということによっても確認される。¹⁹また同じようなことはルール地方の方言にも言える。ルール西部の程度の教養の職業婦人の声をテープに録音し、人々に聞かせる²⁰と、ほとんどの人がこの声の主を「ルール中心部出身の掃除

婦または女工」と答えたという調査がある。²⁰これはルール方言が、ルール中心部の都市の状況とまたその代表的職業と不可分に結びついていることを示す。

言葉の変化は、社会の変化の速度にあわせて急速なものになっている。進歩し、加速する技術、経済、社会の発展は新しい事物、プロセスを作りだし、新しい人間関係、集団を作りだす。一九九六年のIDS（ドイツ語研究所・Institut für deutsche Sprache）の大会は「ドイツ語の諸変種」をテーマにした。その「方言の衰退か方言ルネッサンスか？」というテーマのパネル・ディスカッションにおいて、ドイツ南西部を代表したH・バオジンガーは、地域のアイデンティティーとしての方言とグループ集団語との関係に言及している。

彼は、これは調査の結果ではなく、感じにすぎないと断って、「地域のアイデンティティーが、今日では一部は恒常的な、一部は変化するグループ集団のアイデンティティーの刻印を持つ。具体的には、若者たちはそのアイデンティティーの結びつき、エコーを、方言におけるよりも、地域性を脱した変種に、つまり超地域的な若者の言葉の中に見いだしている」と発言した。重要な問題がほとんど変化していくのに対して、言語変種に関する研究は多く自己満足的な局面に陥っている。職業の領域および生活世界が極端なまでに差異化している中で、方言はどこまで追いつけるのかを彼は問う。具体

的な問題は、専門語と方言はどのような関係にあるか？ 修理工場での作業に際して人々はその様に話すか？ スポーツでは？ 特殊語や集団語は方言とどう関わるか？ どのような状況が方言を求め、また促進するのか？ このような問いへの答えは、従来のような調査（アンケートとテープレコーダー）では不十分であることは確かであるとし、必要なのは参加による観察と質的分析であり、個人とその変化する言語行動に徹底的に集中出来るような道であると結論づけている。彼の発言は、今日の社会の変化と言語状況の変化が、従来の階級モデル、階層モデルとそこにおける言語への拘束、束縛の状況を変えていて、人々が様々な言語状況の中を動き、様々なレジスターを使い分けし得るといふ、選択の可能性の拡大を指摘しているものと思われる。社会集団語や方言の研究はより経験的なものに変化するとともに、社会モデルに関する社会学の議論の進展と協同する必要があると思われる。

注

1 Ehemann, Hermann : Jugendsprache und Dialekt. Opladen. 1992. S. 161ff.

2 Luther, Martin : Kritische Gesamtausgabe. Weimar. 1964. 26. Bd. S. 638. / Siewert, Klaus : Masennatte. In: ZDL. 1991. S. 44. / 石田基広「近世のアウトサイダーとユダヤ人の接触言語につ

- 「ドイツ」『ドイツ文学』第九九号、一九九七。一二四頁も参照。
- 3 Siewert, Klaus : Masematte. In: ZDL. 1991. S. 44.
- 4 ibid. S. 45.
- 5 ibid. S. 47.
- 6 Schoeps, Julius H. (hrsg.) : Neues Lexikon des Judentums. 1992. Gütersloh/München. S. 329.
- 7 ibid. S. 74.
- 8 松波勉子「ドロステ＝ヒュルスホフの〈私たちの郷土では〉」『独逸文学研究』（関西学院大学）29・一九八八。九三頁
- 9 Annette von Droste-Hülshof: Sämtliche Werke, 3. Bd., München. 1925. 邦訳「オタヤ人のブナの木」番匠谷英一訳。岩波文庫。昭和二八年。一〇一頁
- 10 Siewert, Klaus: 42図。S. 47.
- 11 Schoeps, Julius H. : 52図。S. 329.
- 12 Ehemann, Hermann: 12図。S. 13.
- 13 ibid. S. 30
- 14 Ziegler, Edda: Heinrich Heine. Düsseldorf / Zürich. 1997. S. 82.
- 15 Ehemann, Hermann: 12図。S. 40.
- 16 ibid. S. 48.
- 17 Rein, Kurt: Diglossie von Mundart und Hochsprache als linguistische und didaktische Aufgabe. In: Germanistische Linguistik 5/6 (1977), S. 208.
- 18 Ammon, Ulrich: Varietäten des Deutschen. In: V. Agel, R. Hesski, O. Reichmann(hrsg.) Offene Fragen-offene Antworten in der Sprachgermanistik. Tübingen. 邦訳「言語とその地位」松嶋一朗「山仁訳」三三社。一九九二。一〇四頁
- 19 Hundt, Markus: Einstellungen gegenüber dialektal gefährter Standardsprache. Stuttgart. 1992.
- 20 Jakob, Karlheinz: Prestige und Stigma deutscher Dialektlandschaften. In: ZDL. 1992.
- 21 IDS Jahrbuch 1996. Varietäten des Deutschen. Berlin. S. 390.